

敬老の日

今年の敬老の日は、特別な気持ちで迎えました。といいますのも、とうとう私も高齢者の仲間入りをしたからなのですが、65歳なんて実に可愛いもので、世の中には100歳以上の方が約4万8千人もいらっしゃいます。今年の最高齢は、男女共に114歳といいますから驚き以外の何ものでもありません。

なお、男性の114歳というのは、世界最高齢らしいですよ。

毎年、敬老の日には100歳以上の高齢者の数が公表されますが、その数は確実に増加傾向にあり、高齢化が進んでいることがひしひしと感じられます。

これだけ高齢化が進んでくると、敬老の日だからといって喜んでばかりも居られないということでしょうか、祝賀ムードはほとんど感じられません。

敬老の日は、国民の祝日に関する法律で「多年にわたり社会につくしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う日」とされているのですが、どうも高齢者という言葉と老人という言葉には相当のギャップがあり、私自身、長寿を祝ってもらおうという気分には到底なれません。

一般に、高齢化社会というと、高齢化率（65歳以上の人口が総人口に占める割合）が7%以上の社会を指していいいますが、我が国の場合は平成19年に高齢化率が21%を超えています。

特に、我が国では、高齢化と同時に少子化にも歯止めがかからず、今や高齢化社会から超高齢化社会に突入しており、これが経済にも極めて大きな影響を与えています。もはや、かつてのような高度経済成長は望むべくもありません。

人生80年時代の到来は素晴らしいことに違いありませんが、同時に、高齢化は、社会保障費を大きく増大させており、財政赤字の大きな要因となっていることは周知のとおりです。このままでは、現役世代が高齢者を支える仕組みが破綻してしまいます。

一方、周りを見ると非常に元気なお年寄りが多く、また、現役で働いている

高齢者も沢山いらっしゃいます。

国民の負担を抑制しながら、同時に社会保障制度を今後も安定して持続させるためには、年齢に関わりなく、生涯現役で働き社会参加できる仕組みを作っていくことが必要だと考えます。

現在、統計上65歳以上は非生産年齢とされていますが、実態としては生涯現役社会に近づきつつあるのですから、非生産年齢といった考え方自体を見直してみる必要もありそうです。（塾頭 吉田 洋一）